

第一問(現代文) 解答例

(一) ※ここで「後続の他者への信頼」を言うのは難しいか。次の答案のように説明し、3点とれていれば、よくできているほうである。

△貨幣は自分の欲求へ至るための中間的経路に過ぎず、自身の所有物を放棄して貨幣を手しても、必ずしもそれが受容されるとは限らないから。(3点)

(二)

△自己は自身の欲する物を持つ他者が貨幣を欲するから貨幣を欲する訳であるが、他者にも同じ事情があり、この欲求の連続により貨幣制度が成り立っているということ。(4点)
↓前半部分は説明したい内容は伝わるが、もう少し表現を整理したいところ。

△貨幣という形式が成り立つのは、他者が貨幣を欲求しているという信頼だけでなく、その他者の後続の他者も貨幣を欲求しているという信頼が成り立っているからだということ。(4点)

(三)

○貨幣の妥当性が無限の未来を前提にするというのは、加算無限個の他者を意識するのではなく、貨幣を受容する行為と等価だということ。(5点)

△貨幣と物の交換の際に必要な、貨幣の受け手の無限の存在という前提を、人は交換の際に意識しておらず、貨幣を受け取るという行為でその前提を受容しているということ。(4点) ↓「妥当性」という語がなかったのがおしかった。

(四)

△他者の無限列は経験の有限生を超えているという、説明されなくてはならない無限への飛躍を説明なしに前提とした、矛盾した考え方になってしまうこと。(4点)

(五)

△貨幣は、後続の貨幣を受け取る存在に対する信頼があって成るものだが、その後続の他者の想定は市場で具体化できない他者の欲求の反復にすぎず、万人がこの経験則に反した何者としても想定できない他者への信頼をもって初めて貨幣が成立するということ。(6点)

△貨幣という形式が成立するためには貨幣を受容する他者が存在するという信頼の無限性が必要だが、市場の内部において他者は同一性を持ちえないので、その無限性は経験によって合理的に理解することはできず、他者を想像し、予期することが必要だということ。(6点)